

- 五、しやくやく 芍薬 六、ゆり 百合
 - 七、えぞぎく 翠菊 八、ひやくにちさう
 - 九、まつばぼたん 一〇、ほうせんくわ鳳仙
 - 一一、さくよう 桔梗 一二、あやめ
 - 一三、けいとう 鶏冠
 - 一四、せんいちこう千日紅
 - 一五、のうぜんはれん金蓮花
 - 一六、くさけうちくとう
 - 一七、こうわうさう紅黃草
 - 一八、ロベリヤ 一九、さく 菊
 - 二〇、あざがは牽牛花 二一、さくらそう櫻草
 - 二二、ほたるぶくろ 二三、うまのすいくさ
 - 二四、イペリス 二五、りんどう 龍膽
- 實用的のもの
 麥、燕麥、莢豆、さとうり、除虫菊、藥用さぶら

ん、はぶさう、からんだいちご、ほーづき、ゆ
 すらむめ、ぶどう、じゃがたらいも、なんさん
 まめ、わた、
 下等植物

つくし、すぎごけ、ぜにごけ
 大なる水瓶を備へて

金魚、みぢんこ、ひどら等を飼養す、

實驗上の育兒 (ついで)

醫學博士 瀨川昌者君述

臍緒と臍突

▲臍帶の處置 臍帶は一寸五分ばかり残して切
 るものであるが、之れを取扱ふことは最も大切で
 念に念を入れなければならぬ、此の臍帶は無菌ガ
 ーゼカサルチルサンに浸した綿か左もなければホ

一サンに浸した消毒綿で餘り堅くなく、ト云つて緩くては落ちるから程好き加減に包み、尙其上へ綿を置いてズレないやうに注意し丁寧に取り扱はなければならぬ、ズレると無理に引張られて出血する故、臍帯の落ちる迄は綿帯が緩みはせぬか、ズレはせぬか、素の位置に正しくあるか一層此邊の注意を要するのです

▲臍帯と入浴　デ臍帯は生後五日から七日の間に落ちる、其の跡は傷になるが夫れは前回に述べの通り傷として處置しなければならぬ、此傷へはワルチル綿かホーサンワゼリン等を付け再び綿帯を施して措く、併し生兒には毎日入浴させる故湯を浴はせる時は此の綿帯を解いて浴はすものか、又解かずに浴はすものか、孰れが育児法に適つて居るかを説明いたさう、總て僅の事でも其の方法

が前後すると飛んでもない大間違ひになることがあるから能く心得て置かれたい、ソコで此の綿帯は結へた儘解かずに湯へ入れ、湯上りの後身体に湿りを拭取り、其の上で綿帯を取換へる手順にしなければなりません、綿帯を取換へるときも夫れで解いたらホーサン綿等で奇麗に手柔かに拭いて夫れが終つたら前の處置法に従ひ更に綿帯して置くが可い傷へ湯の浸入などは危険に陥る事が多いのです

▲まだ／＼油断出来ぬ　斯く傷の手當を施し居る内に十日間乃至二週間で此の傷は治癒して仕舞ひ、癍痕を残さず奇麗に治つて仕舞う、之れで一先づ臍帯は落ちて傷跡の心配も無くなつたやうなものだが扱是れではマダ／＼油断は出来ない、安心して居ると大變なことになる、其の大變なこと

は、何んなことであらうか、夫れは即ち臍突と云つて、能く小兒に有勝のことですが、是は何ういふ場合に起るのであらうか

▲臍突になる譯 此の臍突と云ふは臍帯の傷が癒つた當時小兒が非常に泣くとか、又は大便のとき息張つたりすると此種な状態になるのです故に是れを豫防するには臍帯の傷が治つたら臍の上へは消毒綿を當て尙一寸四方位に截つたボール紙を其上に置き爾うして繙帯を施すがよい、臍突になつてから直すにはナカ／＼精根に手数を懸けぬと舊に復さぬ故豫め注意されたいものです

▲四ツ手繙帯 以上使用せる普通の繙帯に代ゆるに四ツ手繙帯と云ふのがあつて西洋では之れを用ひるさうだ、圖に示すごとく左右に四筋の紐があつて上部の輪の紐は小兒の首へ懸ける、四角な

る布は横巾二寸五分縦巾二寸位で此の布を臍部に當て、左右四筋の紐は脊へ廻して結び其結目の高くないらぬやう小兒の身体へ當らぬやうになさい、此繙帯は第一大小便が臀部から脊へ廻つても汚れが少なく、又繙帯がヅル事もなく緊乎として居る、併し私は餘り多く之れを使用せず普通の繙帯を用ひたが使ひ慣れると四ツ手繙帯は便利だと云ふから保育者は御實驗になつたら如何です

月不足兒の育て方

▲不完全な發育を補ふ 月満ちて出生た初生兒ですら其の保育法は大に六ヶ敷いもの、ですが親としては發育も良く、ムツクリ肥つた、健全な、無病息才な育て方は何人も希望する所です併し之には一方ならぬ苦心を要する事ですから況して月足らずの初生兒、即ち七月目か八月目で出生た兒

は、素より生來が虚弱ゆゑ、之れを健全に、普通の生兒と同じやうに育て上げる事は至難中の至難である、俗に「七月兒は育つ」と云ふが七月兒でも八月兒でも保育法に依つて決して育たぬ道理はない、故に月足らずの生兒と雖迎も育つまい杯と失望せずに充分手當をよくして生來の不完全な發育を補つて遣らなければならぬ

▲温度が唯一の力 斯く月足らずの生兒を育てるに尤も必要な手當は何んであらうか、之れは即ち生兒の身体の温度を保護する之れが唯一の方法である、一般の注意は勿論なれど聊かでも温度を冷却したら大變です、再び温度を高めやうにも容易に温まらず遂には其の兒をして不愜な目に逢はせなければならぬ、元來月滿ちて生れた普通の生兒でも温度を保護するの必要は前に述べた通りな

れど、尙其の温度より一層高くボカ〜と温かにしなければならぬ

▲手落なく實行せよ 身体の温度を保護すると一口に云くば誠に難作ないやうに聞えるが其の方法が實に難かしい、先づ第一に毎日室内の温度を一定させねばならぬ、冬なれば尙更のことです、次に室内の温度のみでない其の生兒を寢せる床の内温度も何時も一定に温くなければならぬ、一時でも半時でも此温度が低くならぬやう、左りと又餘り高過ぎぬやう注意する其苦心は必ず一通りの事でない、夫れを手落ちなく實行しなければ月足らずの初生兒は決して育たぬと斷言して憚からぬのであります

▲湯に装置せる箱 西洋では斯ういふ生兒を育てるときは、箱の家を造り、箱の周圍へは温湯を

萬遍なく通され、詰り箱が湯の中へ浸されて湯の温度で箱の内部は温たまる装置ですが其の箱の中へ寝せて保育するのです、此の装置で湯の温度を終日も一定し置けば箱の中なる生児は少しでも冷る事なく安全に育てることが出来る、我國でも月足らず兒を保育するには此の箱の装置の積りで温度を一定に保つことを考へなければならぬ

▲温度の高低 扱此の温度は華氏六十五度から七十度の間を一定して保たしむるやうに、其の方法としては湯たんばを床の中へ左右後と三ヶ處位入れ置き床へ手を入れてもポカ／＼するやうに温く室内も夫れに準じ火氣を用ひて温度の低下せぬやうに仕なければならぬ

生児の抱き方
▲搖籃の大欠點 今度は生児の抱き方ですが、

何う抱いても宜いやうなもの、決して爾うでない抱き方は發育に大關係ある事と心得なければならぬ、西洋では生れた兒を搖籃へ乗せて揺りますが、之れは生児が泣いて、機嫌の悪いときに用ひるのです、爾うすると生児が妙に泣き止んで機嫌が直りスヤ／＼と眠りますから揺られるので大層心持の良くなる事と考へられました、然るに近年に至り此の搖籃の大欠點を發見され、斯う云ふものへ乗せて揺るのは罪もない生児に魔酔藥を與へると一般で、生児が泣き止むも機嫌の直るも、又安眠の状態に入るも之れは大切なる腦を麻痺させて夫れが爲め知らず識らず眠りに就くのであるとの説が高くなり、斯んな欠點のあるものを用ひてはと孰れの家庭でも其の弊害を認め或る母親などは今更の如く身振ひして止めた程です飛んだ間違ひ

のあつたものではありませんか

▲抱いて搖る害 處が我國の育兒上にも此の搖

藍の缺點に劣ぬ從來の惡弊があつて、夫れを氣が

つかずに實行して居る、習慣上是非ない事では

あるが何か其丈は速に改良して貰ひたいと思ふ、

デ夫れは生兒を抱いて搖る事です、誠に之ればか

りは誰れも行ること、子守唄でも靜に語り、抱

いて搖つて居ると實に愛が籠つて優しい情の見え

るものだが夫れが飛んでも無い大間違ひで搖藍で

搖るのと同じ道理であります、故に其生兒がスヤ

／＼と夢に入るのも子守唄の興に入たるでもなく

愛の心に感じたでもない全く腦が痲痺して、言は

い魔酔劑でも飲されたやうな心持になつて思はず

まどろむのであります、斯く腦の危険をお咄し仕

たら孰れの親達も自ら好んで生兒を魔酔させる者

はありますまい、抱いて搖る丈は直にお廢しにな
る事と信じます

▲ハンモックも同じ弊害 夫れからモ一ツ御注

意して置きたいのは近頃大分ハンモックを釣つて

夫れへ小兒を乗せて搖るのを實見する事がある、

ハンモックでも用る位故此の家庭は先づ改良に御

熱心な方と見受けるが夫れですら育兒上の誤解を

來して西洋の搖藍に等しい弊害を遂行されて居る

既に西洋では缺點を認め改良された事が今日日本

でマダ實行されるのも即ち日本には適當な實驗上

の育兒書が乏しい爲めで、西洋の育兒書が其儘譯

譯され、原書は其後改正された點があつても譯書

は改竄されずソツクリ元の儘で今日日本の家庭に

求められ、誤りありと知らずに其説を信用し、遂

にハンモックへ生兒を乗せて搖るやうな間違ひを

實行されるのです、ハンモックで揺つても抱いて
揺つても搖籃に等しく育兒上の遺弊故直に改良の
道を講ずるやう特に御反省を願ふのです

新年の重詰

石井泰次郎

こゝに記す所の、重詰の拵方は、普通料理の一
種として、初春の客來に調ふべき仕方を示した
るのみ、趣向のよろしきは、世間に多くありふ
れたれば、拙き組合せも、かへりて面白からん
○羽子板かまぼこの拵方

蒲鉾の肉よりつくりて拵へる、教へ方は、教場
にての事なれば、此にたれにても作らんとする
には、有合せの薄鉾、或はハンペンなどを以て
作るかた、手やすからん、ハンペンを、羽子板

(杉にて薄く一分位に、長さ三寸、握る柄の所一
寸餘、合せて四寸餘の小さき羽子板をつくり置
くべし、木具物師にあつらへて拵へてよし)の
大きさに切方して、板の上のせ、美濃紙を細
くたちて、三筋ほど、すぢかへに張付け置き紅
にて、一面にぬりて、あとにて、紙をそつと取
のけ、模様をあらはすべし

○紅は、細工紅の生上味を用ふ、又は口紅を
以てぬりてもよし。

○羽子の子　鴨の拵方

鴨をつくりて、肉を、能く切てたゝきて、丸め
て、別に鍋に醬油と味淋を煮かへしたるに、鴨の
皮を入れて炊て、味を出して、後に皮をとりの
ぎきて、あとへ丸めたる鴨を入れて、煮ころば
して、味をつけて、取上て、鴨の羽のみじかき